様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ６ 月　 ８ 日現在

機関番号：３３９２５
研究種目：基盤研究(B)（一般）
研究期間：2016～2019
課題番号：１６Ｈ０３４４６

研究課題名（和文）ＥＡＰライティング技能の育成に向けた学習者との協働による自律学習システムの構築

研究課題名（英文）Developing autonomous learning systems through collaboration with learners for the improvement of EAP writing skills

研究代表者
田地野　彰（TAJINO, AKIRA）

名古屋外国語大学・外国語学部・教授

研究者番号：８０２８９２６４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　9,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、学生との協働を通じて、EGAPからESAPへの有機的な連携のためのライティング目標の設定とその目標達成のためのプロジェクト型学習システムの開発を行った。まず、大学生が習得すべきEAPライティング技能と知識について教員の意識調査を行った。シラバス、教科書、ルーブリックに焦点を当てた調査も行い、EAPライティング教育の現状とEGAPからESAPへの連携における課題を整理した。それらの結果を踏まえ、体系化された技能や知識を習得するためのタスク開発とオンライン自律学習システムを構築し有用性を検証した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究は、大学におけるEAP教育充実のために効果的なライティング教育システムの構築を目指した。本研究の意義は以下の3点である。１）アカデミックライティング指導を可能にするPBLによる自律学習システムを構築した。２）アカデミックライティング教育の現状把握と課題整理を通して、EGAP と ESAPの連携に向けた提案を行った。３）教材開発において学習者との協働を取り入れることの有用性を実践的に検証し、今後のライティング指導方法の方向性を示した。

研究成果の概要（英文）：In this study, we have identified objectives for writing education that organically link EGAP and ESAP, and developed a project-based learning system to achieve those objectives in collaboration with students. First, we administered a survey to teachers on EAP writing skills and knowledge that university students should acquire. Second, we conducted a series of analyses on syllabi, textbooks, and rubrics to identify the current situation of EAP writing education and the challenges in linking EGAP to ESAP. Finally, based on those results, we have developed and verified tasks used to create an autonomous learning system for students to systematically acquire necessary EAP writing skills and knowledge.

研究分野：教育言語学

キーワード：EAP　ライティング　タスク　教材開発　PBL

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

１．研究開始当初の背景

世界的に卓越した研究を推進していくためには、専門分野における英語学術論文作成技能や知識が不可欠であり、学術目的の英語（English for Academic Purposes：EAP）教育のさらなる充実を図る必要がある。EAP の中でも一般学術目的の英語（English for General Academic Purposes：EGAP）では分野共通の学術的言語技能や知識、特定学術目的の英語（English for Specific Academic Purposes：ESAP）では特定の専門分野に特化した学術的言語技能や知識が必要だと言われているが、各技能や知識が何を指すかは、十分に明確化されておらず、文脈や教員の経験知に依存するところも大きい。EGAP を有機的に ESAP につなげるための体系的な教育システム、特にライティング教育システムのさらなる研究が必要とされている。

２．研究の目的

上記の背景を踏まえて、本研究では学習の主体である専門教育課程の学生との協働を通じて、EGAP から ESAP へとつなげるためのライティング目標の設定、その目標を達成するための学習タスクの開発を行った。具体的には、本研究の目的は以下の 3 点に要約される。

① 英語教員が考える大学生が習得すべき EAP ライティング技能と知識を明らかにする。
② シラバス、教科書、ルーブリックに焦点を当てた調査を通して、EAP ライティング教育の現状と課題を把握し、EGAP から ESAP への連携における課題を整理する。
③ 学生主導によるプロジェクト型学習（Project-Based Learning：PBL）を行い、学習者視点を取り入れた、体系化された技能や知識を習得するためのタスクの設計・開発を行うとともに、授業外での利用を想定して自律学習システムを構築する。

３．研究の方法

上記の三つの目的を達成するために、以下に示す手順により研究・開発を行った。

① アカデミックライティング指導経験のある大学英語教員 40 名を対象に、アンケート調査を行った。そのうち、5 名を対象にフォローアップのインタビュー調査も実施した（2017 年 5 月～2018 年 2 月）。アンケート項目は 4 つのカテゴリーに分類され（１．EAP ライティングの基本技能、２．ライティングのプロセス、３．論文のセクション、４．学術リテラシー）、合計 47 項目の設問から構成されている。各項目について、いつ・どの科目で学習するのが適切と考えるかをたずねた。
② EAP ライティング教育の現状と課題を把握するために、(1) シラバス、(2) 教科書、(3) ルーブリックの調査を行った。まず、シラバス調査については、近年、多くの大学で初年次教育において日本語レポートの書き方指導が行われていることから、英語・日本語アカデミックライティング教育の共通点・相違点の把握も目指して、日本語の授業も調査対象とした。初年次生向け 2016 年度授業シラバスから、英語授業については EAP 実施大学を中心に 24 シラバス、日本語授業については The Writing Centers Association of Japan 加盟大学のリストをもとに 34 シラバスを収集した。「到達目標」を主な調査対象とし、テキストマイニングによる共起ネットワーク分析を行った。次に、教科書調査については、EAP 実施大学において大学 1 年生レベルで使用されている市販教科書 10 冊を収集した。また、高校でのライティング指導状況も把握するために「英語表現 I」用の教科書のうち、平成 31 年度東京都立高等学校で採用校数が多い上位 3 冊を取り上げた。EAP ライティングの基本と考えられる 4 点（アプローチ、語彙と文法、批判的思考、文献資料の使用）に焦点をあてて、高校と大学の教科書の特徴を比較分析した。最後に、ルーブリック調査として、学習者視点を導入した EAP ライティングルーブリックを開発する際の課題を整理するために、EAP カリキュラム実施大学の 2 年生 17 名を対象にアンケート調査を行った。アンケート項目は上記研究①の 4 カテゴリー計 47 項目であり、各項目について「英語アカデミックライティングにおいてどのくらい重要か」を「全く重要ではない・あまり重要ではない・やや重要・とても重要・聞いたことがない」の 5 件法で調査した。
③ PBL によるタスクの設計・開発、自律学習システム構築については、上記研究①での結果を踏まえ、論文執筆における要旨（abstract）の作成に焦点を当てた。PBL には、応用言語学を専門とする博士前期課程および博士後期課程の学生 1 名ずつが参加し、学習者の視点を取り入れつつ要旨執筆支援システムの構築を行った。また、そのシステムの学習効果を検証するため実験を実施した。

４．研究成果

研究結果は以下の 3 点に集約される。

① 教員を対象としたアンケート調査：ライティングの基本技能とプロセス（カテゴリー１と２）については、学部 1、2 年生で学習すべき内容として、EAP 教員間で比較的類似した回答が見られた。論文各セクションについての学習時期、その他ライティング技能を支える学術リテラシー（カテゴリー３と４）についての考え方には、意見の相違があった。
② シラバス調査：シラバスから見るライティング教育の目標については、英語と日本語のアカデミックライティングで共通する点として、「自分の意見をつくる」「自分の意見を適切に表現する」が抽出され、中等教育までの「調べ型」や「まとめ型」ではなく、意見や主

張が求められていることがわかった。相違点としては、英語では日本語直訳の「和文英訳」からの発想転換、日本語では剽窃にならないための「引用」が強調されていた。英語では「パラグラフライティング」と明示されていたが、日本語では「論理的な文章」とあり、論理的な文章とはどのようなものかは読み取れなかった。
教科書調査：EAP ライティングの基本である 4 観点（アプローチ、語彙と文法、批判的思考、文献資料の使用）をもとに、高校と大学で使用されている教科書の特徴分析を行った。調査対象となった高校の教科書では、和文英訳や自分の意見を述べるライティング設問が中心であり、批判的思考や文献資料の使用が求められるライティングは見られなかった。一方、大学の EAP 教科書は、パラグラフライティングの学習を中心とする教科書が多かったが、ピアレビューやルーブリックを活用した教科書は限定的であった。国内出版の教科書については、EAP ライティングに特に関連のある文法や語彙の練習問題をある程度含む必要性が確認された。また、批判的な読みとライティングの連続性を意識して設計されている教科書は少なかった。高校と大学の各段階でどのようなタスクが批判的思考を育成するかについて、より詳しく検討する必要性が浮き彫りになった。今回調査した EAP 教科書では文献資料の使用や引用スキルの学習を扱ったものは少なかったが、EAP 導入段階でも資料を使用することは多いため、学生に正しい引用方法を教える工夫が必要であろう。今回の調査結果からは、教科書分析の方法として本研究の 4 観点が使用できることが示唆され、EAP 教材開発におけるチェックリストとして発展させることができると考えられる。学生の自律的学習を促すために、EAP ライティング研究の知見をより一層反映させた教材開発が求められる。
ルーブリック調査：アンケートからは、汎用的なリサーチスキルの修得を求める英語教員とは対照的に、学生は英語アカデミックライティングを語学スキルであると考えていることが判明した。また、学生は「モデルライティングの分析」は重要ではないと考えていることがわかった。教員は、フィードバックと修正の作業を含むライティングプロセスを修得すべきと考えるが、学生はプロセスについてはそれほど重要とは考えていなかった。学生が日本語でも書いたものに対してフィードバックを与える・もらう機会が少ないことも、学生がそう考える理由の一つであると推測できる。
以上のことから、EGAP・ESAP 科目の連携のみならず、初年次教育や教養科目、高校までの英語教育との有機的連携の重要性も再確認できた。英語教員と専門教員の連携の場合、内容とスキルにおける連続性を持たせること、英語教員同士および専門教員と学生とで評価ルーブリックを共有して評価を可視化することなどで、一貫性および連携の改善が容易となる。そのほか、初年次教育や高校までの学習内容や指導方法を把握し、ある程度 EAP 教育現場で反映させることにより、学生の「全体的な学び」という視点での連続性が生まれるだろう。

③ PBL による自律学習システムの開発と検証：以下の流れで自律的に学習を進める支援システムを構築した。(1) オンライン上で学術論文の基本的な構成および要旨セクションの構成要素や論の展開（ムーブ）、また論文検索の方法等について、モデル論文を用いて学習してもらう、(2) 学生が各自関心のある学術論文を探し、論の展開をムーブ分析するとともに、論文の展開を引き出す表現に下線を引いてもらう、(3) 各自のムーブ分析の結果を公開し、他の学生の分析から気づいたことをコメントしてもらう、(4) 要旨を除いた論文を提示し、その要旨を学生に書かせる、(5) ピア・フィードバックを通して理解を深める、(6) ピア・フィードバックを基に課題を添削させる。教員および 2 名の評価者（PBL に参加した大学院生）により、課題を評価した結果、論理展開や学術的な表現などにおいて、質の高い要旨が作成できていることが確認できた。また、学習者を対象としたアンケートにおいても、学習した内容が将来的に役立つと思うなど、好意的な意見が出された。PBL に参加した大学院生が、学習者の視点に立ち、オンライン学習であっても孤立しないよう、協働学習の要素を含むことで学習を活性化させることができた。一方、モデル論文ではなく、各自で探した論文の構成やスタイルに過剰に影響されてしまうなどの課題も明らかになった。

2019 年度に、国際シンポジウム「International Symposium on Teaching English for Academic Purposes, Kyoto」を開催して最終研究成果を発表した。「Towards a New Paradigm for Teaching English for Academic Purposes in Japan」と題したパネルディスカッションも行い、研究成果を次につなげる方法や方向性を模索した。理論的な側面に重点をあてた研究結果については、Tajino, A. (Ed.) (2019) *A systems approach to language pedagogy* (Springer)などの著書で研究成果を発表している。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計3件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 マスワナ紗矢子，渡寛法，飯島優雅，渡辺敦子，高橋幸，金丸敏幸，田地野彰，寺内一	４．巻 1
２．論文標題 日本におけるEAP教員コンピテンシー枠組み構築の試み―BALEAP学会による枠組みの日本語試訳を通じて―	５．発行年 2019年
３．雑誌名 JAAL in JACET Proceedings	６．最初と最後の頁 46-51
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 Terauchi, H.	４．巻 1
２．論文標題 ESP Education in Japanese Universities: Past, Present and Future Prospects	５．発行年 2017年
３．雑誌名 Selected Papers from the Twenty-sixth International Symposium on English Teaching, English Teachers' Association-Republic of China	６．最初と最後の頁 63-73
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 渡寛法・マスワナ紗矢子.	４．巻 6
２．論文標題 大学におけるアカデミック・ライティング教育の動向―シラバスの共起ネットワーク分析から―	５．発行年 2017年
３．雑誌名 Studies in English Teaching and Learning in East Asia	６．最初と最後の頁 41-50
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計21件（うち招待講演　12件／うち国際学会　6件）

１．発表者名 Terauchi, H.
２．発表標題 Collaboration between KATE and JACET: The Beginning, the Present and Future Prospects
３．学会等名 KATE 2018 International Conference (Sookmyung Women's University, Seoul, South Korea)（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 寺内一
２．発表標題 ESP教育の理論と応用　学部教育への導入に向けて
３．学会等名 文京学院大学外国語学部FD委員会（文京学院大学）（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Terauchi, H.
２．発表標題 Self-Access Study System for Businesspersons
３．学会等名 3rd JALT BizComSIG Conference (Toyo University) （招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Terauchi, H.
２．発表標題 English for Business Purposes: Development of a Self-Access On-Line Study System for Business Meetings
３．学会等名 2018 ALAK International Conference (Sogang University, Seoul, South Korea)（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Maswana, S., & Terauchi, H.
２．発表標題 A Genre Systems Approach to Academic Writing
３．学会等名 2018 ALAK International Conference (Sogang University, Seoul, Korea)
４．発表年 2018年

１．発表者名 マスワナ紗矢子，渡寛法，飯島優雅，渡辺敦子，高橋幸，金丸敏幸，田地野彰，寺内一
２．発表標題 日本におけるEAP教員コンピテンシー枠組み構築の試み
３．学会等名 第1回JAAL in JACET学術交流集会（高千穂大学）
４．発表年 2018年

１．発表者名 マスワナ紗矢子，渡寛法，山田浩，飯島優雅，渡辺敦子，田地野彰，高橋幸，金丸敏幸，寺内一
２．発表標題 日本の大学における学術英語カリキュラムの実態調査
３．学会等名 第1回JAAL in JACET学術交流集会（高千穂大学）
４．発表年 2018年

１．発表者名 マスワナ紗矢子，高橋幸，金丸敏幸，笹尾洋介，田地野彰
２．発表標題 英語学術論文執筆に必要な技能と知識 ― 英語教員の視点から
３．学会等名 第192回東アジア英語教育研究会（西南学院大学）（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 寺内一，マスワナ紗矢子
２．発表標題 EAPライティング教育におけるシラバス・デザインとタスク活動
３．学会等名 第192回東アジア英語教育研究会（西南学院大学）（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 田地野彰
２．発表標題 これからの大学英語教育―「英語を」から「英語で」へ―
３．学会等名 シンポジウム「これからの英語教育」（名古屋外国語大学）（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 田地野彰
２．発表標題 京都大学における学術目的の英語（EAP）教育の展開
３．学会等名 シンポジウム「大学の総合力を活かした外国語教育：スキルと教養」（京都大学）（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Terauchi, H., Noguchi, J., Tajino, A., & Naito, H.
２．発表標題 ESP in Japan: Past, Present and a Look Ahead
３．学会等名 Faces of English 2: Teaching and Researching Academic and Professional English, The University of Hong Kong（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 Watari, H., & Maswana, S.
２．発表標題 A Syllabus Survey of Academic Writing Education in Japanese Universities
３．学会等名 Faces of English 2: Teaching and Researching Academic and Professional English, The University of Hong Kong（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 Terauchi, H.
２．発表標題 ESP Education in Japanese Universities: Past, Present and Future Prospects
３．学会等名 The 26th International Symposium on English Teaching, English Teachers’ Association-Republic of China, Taipei（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 Terauchi, H.
２．発表標題 EAP in University Education in Japan, Taiwan and Hong Kong
３．学会等名 The 38th Thailand TESOL International Conference 2018, Chiang Mai（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 マスワナ紗矢子・田地野彰
２．発表標題 アカデミックライティング技能と知識に関する英語教員の意識調査
３．学会等名 ESP 1 Day Conference at Takachiho University, Tokyo
４．発表年 2018年

１．発表者名 飯島優雅・高橋幸・田地野彰
２．発表標題 EAPカリキュラム実態調査結果と示唆
３．学会等名 ESP 1 Day Conference at Takachiho University, Tokyo
４．発表年 2018年

１．発表者名 田地野　彰
２．発表標題 これからの発信型英語教育を考える－アクティブラーニングの実現に向けて－
３．学会等名 大学英語教育学会東北支部大会（招待講演）
４．発表年 2016年

１．発表者名 田地野　彰
２．発表標題 大学英語教育の現状と課題
３．学会等名 大学英語教育学会関東支部第10回記念大会（招待講演）
４．発表年 2016年

１．発表者名 田地野　彰
２．発表標題 これからの英語教育を考える ― 初等教育から高等教育まで ―
３．学会等名 日本比較文化学会関西支部大会（招待講演）
４．発表年 2016年

１．発表者名 渡　寛法、田地野　彰
２．発表標題 アカデミックライティング教育の動向―シラバス分析の観点から―
３．学会等名 大学英語教育学会九州・沖縄支部第170回東アジア英語教育研究会（招待講演）
４．発表年 2016年

〔図書〕　計2件

1．著者名 Tajino, A. (Ed.)	4．発行年 2019年
2．出版社 Springer, Singapore	5．総ページ数 149
3．書名 A Systems Approach to Language Pedagogy	

1．著者名 Terauchi, H., Noguchi, J., & Tajino, A. (Eds.)	4．発行年 2019年
2．出版社 Routledge, U.K.	5．総ページ数 226
3．書名 Towards a New Paradigm for English Language Teaching: English for Specific Purposes in Asia and Beyond	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

6．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	寺内　一 (Terauchi Hajime) (50307146)	高千穂大学・商学部・教授 (32637)	
研究分担者	高橋　幸 (Takahashi Sachi) (50398187)	京都大学・国際高等教育院・准教授 (14301)	
研究分担者	金丸　敏幸 (Kanamaru Toshiyuki) (70435791)	京都大学・国際高等教育院・准教授 (14301)	

６．研究組織（つづき）

	氏名 （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	マスワナ　紗矢子 (Maswana Sayako) (60608933)	目白大学・外国語学部・准教授 (32414)	
研究分担者	笹尾　洋介 (Sasao Yosuke) (80646860)	京都大学・国際高等教育院・准教授 (14301)	
研究分担者	渡　寛法 (Watari Hironori) (20732960)	滋賀県立大学・全学共通教育推進機構・特任准教授 (24201)	